

日高海域におけるツブ類の漁獲状況について

○はじめに

2021年9月下旬に北海道東部太平洋沿岸においてカレニア・セリフォルミス（無殻渦鞭毛藻類）が優占した大規模な有害赤潮が発生し、根室から日高海域に至る広い範囲で、ウニやサケなどが大量にへい死し、沿岸漁業に甚大な被害をもたらしました。ツブ類（アワビ類を除く食用巻貝の俗称）も被害を受けた水産生物の一つで、日高海域のツブ類の漁獲量は、有害赤潮前の2020年には1,738トンでしたが、有害赤潮後の2022年には537トンまで大きく減少しました。また、赤潮から3年が経過した2024年でも911トンにとどまり、赤潮前の水準には戻っていません。北海道では50種以上のツブ類が食用として利用されているとされます。これらには外見がよく似た種が多く、分類が難しいため、漁獲統計上ではツブ類として一括りに集計されています。資源の状態を把握するために、種ごとの漁獲量は基本となる重要な情報ですが、どの種がどの程度減少したのか、その実態は明らかになっていません。そこで、北海道日高海域で漁獲されるツブ類を収集し、種ごとの漁獲状況を調べました。

○日高産ツブ類の銘柄名と種名の関係

日高海域で漁獲されたツブ

表 1 日高産ツブ類の銘柄と種名の関係

類を収集し、形態的特徴から種を同定し、標本として入手できたものについて、現場で使われている銘柄（産地市場での呼び方）と種名（和名、学名）の関係を調べました（表 1）。収集できたツブ類は、計 15 銘柄であり、種同定の結果、フジツガイ科アヤボラ属、エゾバイ科エゾバイ属およびエゾボラ属に属する 2 科 3 属 11 種が確認されました。一方で、4 銘柄で

海域	銘柄名	和名	学名
新ひだか町沖	けつぷ	アヤボラ	<i>Fusitriton oregonensis</i>
	ごまつぷ	オオカラフトバイ	<i>Buccinum verkruzeni</i>
	ばいつぷ	エゾバイ	<i>B. middendorffi</i>
	まつぷA	エゾボラ	<i>Neptunea polycostata</i>
	まつぷB小	ユキドケエゾボラ	<i>N. hiberna</i>
		クリイロエゾボラ	<i>N. aurigena</i>
	まつぷB中	ユキドケエゾボラ	<i>N. hiberna</i>
		エゾボラモドキ	<i>N. intersculpta</i>
	まつぷB大	エゾボラモドキ	<i>N. intersculpta</i>
	まつぷABピン	エゾボラ	<i>N. polycostata</i>
		ユキドケエゾボラ	<i>N. hiberna</i>
えりも町沖	いそつぷ	フジイロエゾボラ	<i>N. vinosa</i>
	あおつぷ	ヒメエゾボラ	<i>N. arthritica</i>
	もつぷ	アヤボラ	<i>F. oregonensis</i>
	燈台つぷ	オオカラフトバイ	<i>B. verkruzeni</i>
	真つぷA	エゾボラ	<i>N. polycostata</i>
	真つぷB	エゾボラモドキ	<i>N. intersculpta</i>
		クリイロエゾボラ	<i>N. aurigena</i>
		ユキドケエゾボラ	<i>N. hiberna</i>
	真つぷ岡小	フジイロエゾボラ	<i>N. vinosa</i>

は、1 つの銘柄に複数の種が混在していることが分かりました。ケツブ（和名：アヤボラ）とマツプ A（和名：エゾボラ）については、新ひだか町沖とえりも町沖の両海域で同じ呼び方で扱われていました。アヤボラは缶詰などの加工原料として利用されることが多い一方、エゾボラは主に刺身などに利用され、日高海域では最高級とされる大型のツブです。

○えりも町沖における種別漁獲量

有害赤潮が発生した 2021 年より前の銘柄別の水揚げデータが得られた、えりも町沖に

ついて、銘柄と種名の関係をもとに過去に遡って種別の漁獲量を推定しました（図 1）。図 1 の「その他」は、種同定をするための漁獲物標本が収集できなかった銘柄をまとめて示しています。各年の割合を種別にみると、アヤボラが最も多く、全体の半分以上を占めていました。

有害赤潮の発生前後で比較するため 2022 年の漁獲量が 2020 年の何%になったかをみると、すべての種で漁獲量は減少していました。具体的には、アヤボラが 36%、オオカラフトバイが 13%、フジイロエゾボラが 19%、エゾボラが 0.09%、また、エゾボラモドキ、クリイロエゾボラ、ユキドケエゾボラの 3 種を合わせた漁獲量は 0.53%でした。最も減少していたエゾボラの漁獲量は 2016 年以降減少傾向にあり、2020 年には 139 トンでしたが、赤潮後の 2022 年には 0.12 トンまで減少しました。赤潮から 3 年後の 2024 年でも 0.95 トンにとどまりました。

○さいごに

種別の漁獲量を推定した 7 種のうち、アヤボラ以外はエゾバイ科に属し、卵から少数の稚貝がふ化するのに対し、アヤボラはフジツガイ科という別のグループに属し、多数の浮遊幼生がふ化するという繁殖生態の違いがあります。繁殖生態以外にも、分布や食性、産卵場所など、それぞれの種の生態の違いが、赤潮による影響の受け方や、資源の減少・回復の違いにつながっている可能性があります。しかし、ツブ類の多くの種では、基本的な生態がほとんどわかっていません。このため、道総研では、今後も漁獲量のモニタリングを継続するとともに、生態に関する情報収集を進めていきます。

（2026 年 10 月 2 日 担当：北海道立総合研究機構栽培水産試験場調査研究部
高橋昂大）

本研究は、水産資源調査・評価推進委託事業で得られたデータを使用しました。

本著作物の著作権は道総研に帰属します。

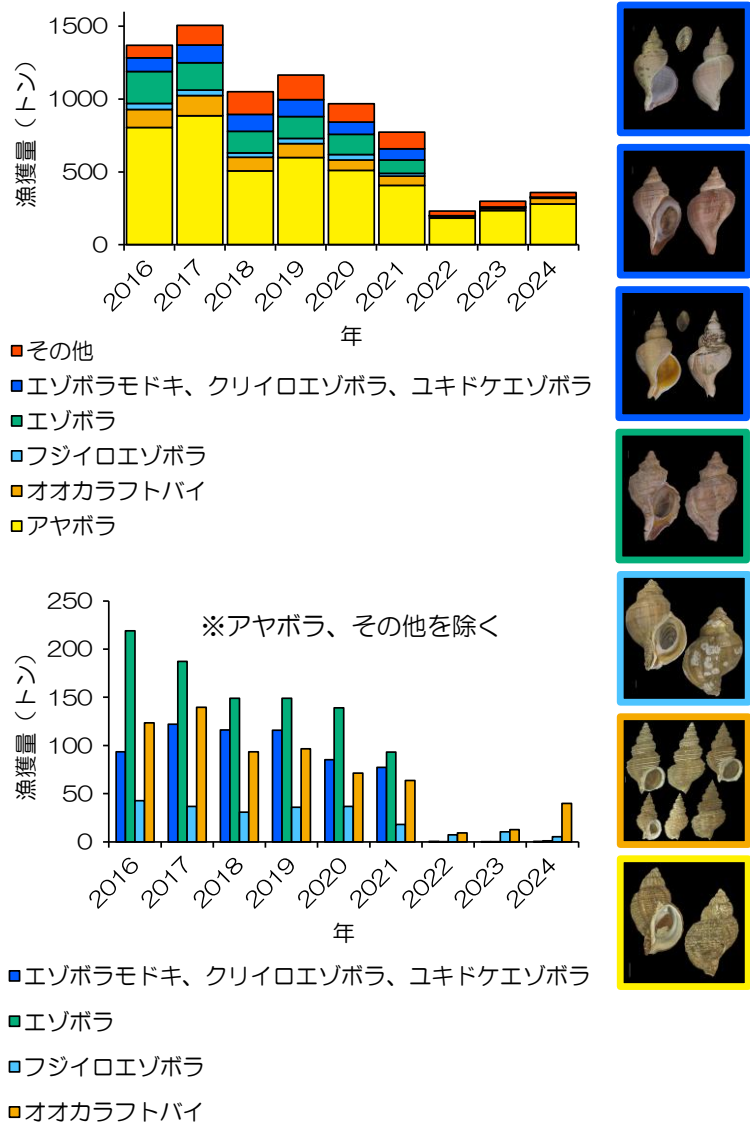


図 1 推定されたえりも町沖の種別漁獲量
※下図は、アヤボラ、その他を除く